

稲作

令和8年稲作スタート

令和8年稲作が始まります。今年も気象変化に負けずに柔軟に対応していくことが必要です。新しい技術や資材はたくさんありますが、まずは基本技術をきちんと積み上げることが一番の近道です。本格的に作業が始まる前に、栽培技術のポイントを確認しておきましょう。

土づくりを起点とした異常気象対策

収量確保、品質向上のためには「土づくり」を確実に実施していなければなりません。目に見えない土の中を稲が育ちやすい環境にしていく作業は、春先しかできません。これまで培ってきた経験値に加えて、今の天候に合わせた生育管理への意識変革が必要です。

収量向上も苗作りから

近年は田植え後の天候や異常還元等の影響により、初期生育の遅れが課題となっています。これを回避するためにも健苗育成の重要性が増しています。種子更新から始まり、種子消毒、浸種、催芽、出芽、ハウス内温度管

理と約1か月半に渡る管理が後々の収穫に影響を及ぼします。令和時代も「苗半作」が基本となります。

茎数確保で収量を得る

穂になる有効茎をどれだけ確保できるかが課題です。分げつ促進対策とそれを妨げる要因への対策として、前述の「健苗育成」のほか、異常還元対策など、初期生育を止めない、促す対策が必要です。

温暖化気象に対応した稲づくり



基盤となる土づくり 基本技術の徹底を

計画的な作業を

浸種や種まき、育苗は田植え予定日から逆算して行くと、作業に余裕が生まれてきます。田植え後も生育を観察し、適期作業ができるよう、今後の作業を見える化していきます。

| 苗の種類 | 田植え予定日 | 育苗日数 | 播種日 | 陰干し | 催芽 | 浸種期間 |
|-------|-----------|---------------|-----------|------|---------|-------------|
| 稚苗 | 5月15日～20日 | 25日 | 4月25日～30日 | 1～2日 | 播種2～3日前 | 播種日の13～15日前 |
| 中苗 | 5月20日～25日 | 35日 | 4月20日～25日 | | | |
| 自分の計画 | 5月 日～ | 田植え日 △育苗日数 | 4月 日 | | 4月 日 | 4月 日 |

自分の計画を書きこんでみましょう！

NOSAI から 園芸施設共済 春の嵐に備えて **水稲育苗ハウスにご加入を!**

被覆、未被覆期間を補償する周年加入です。(被覆期間は1ヶ月から選べます)。
※詳しくはNOSAIまで TEL.0187-63-1066

なんととっても安心が一番!

病害リスクの少ない清潔な環境づくり

作業場内や育苗施設周辺にある稲わらや籾殻、ほこりには前年の病原菌が付着している可能性があります。あらゆる病気の伝染源になってしまいます。前年にもち病が発生した場合は、育苗ハウス周辺に籾殻を放置しないでください。本格的な作業に入る前にしっかりと清掃を行い、病害リスクを低くしましょう。

種子保管

風通しが良い日陰で、直接地面に置かないように注意します。

清潔な水を使用

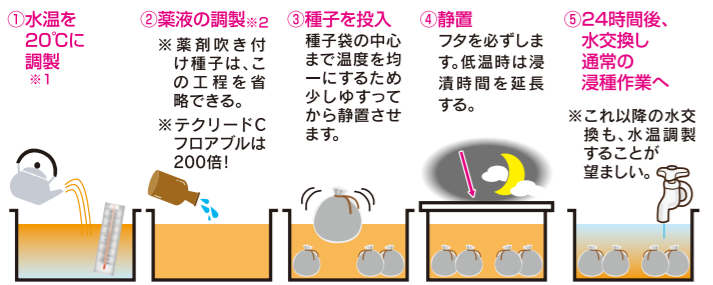
栽培期間中に使用する水は水道水や、井戸水を使用します。

品種取り間違いに注意

近年は取り扱う品種が増えてきています。誰が見ても分かるよう品種毎に種子籾袋を札や色等で区別して管理し、取り扱いをします。

資材消毒

病害対策として資材消毒剤「ケミクロンG」「イチバン」を使用して、種子予措、育苗作業に使用する器具や容器を全て消毒します。



※1種子を投入した際に水温が適温まで下がることを狙って、最初に少し高めの水温に調整します。
※2ヘルシード剤、テクリード剤ともに浸種水温10℃以下では薬剤効果が不十分になり生育抑制につながる場合があります。

種子消毒時の水量は、種子1kg:水3.5リットル
種子消毒時の水量が多すぎると薬剤の濃度不足になり、少ないと薬害の可能性があります。適切な水量で種子消毒を実施しましょう。

薬剤を効かせる種子消毒

種子更新を必ず行います。テクリードC薬剤吹付け種子は、浸種により薬剤が水に溶け、それを吸水することではじめて消毒効果が発揮されます。水温が低いと消毒効果が十分に発揮されませんので、最初の水温をお湯で調整する必要があります。県外産種子を含めて無消毒種子を消毒する場合は防除効果の高いテクリードCフロアブルを使用する他、品種や防除方法が異なる種子は容器を分けて浸種・催芽をします。

揃った出芽のために種子予措はより丁寧に

令和7年産の種子の発芽率は、例年並みの90%以上であることを確認しており、出芽の勢いも変化はありませんでした。揃った出芽のためには、水温・温度管理の徹底が必要です。浸種では、水温10℃以上とし、積算水温にとらわれず必ず種籾の様子を確認しましょう。催芽では、温度ムラを無くすため催芽前の湯通しを推奨します。加えて適正温度30～32℃で催芽をします。

温湯消毒種子は清潔に取り扱いを

温湯消毒種子は無菌状態の種子なので、保管から浸種後も清潔に保つことが重要となります。

温湯消毒種子の取り扱い

- ✓ 温湯消毒種子と他の種子は分けて取り扱う。
- ✓ 泥、水、ホコリ、ゴミと触れないように保管。
- ✓ 使用する水は水道水か井戸水。
- ✓ 水量は種子量の2倍。
- ✓ 浸種期間中は基本的に毎日水交換。
- ✓ 浸種期間中は水の循環は絶対に行わない。

苗いもち防除を確実に実施

いもち病菌は、乾燥状態で稲わらや籾殻に付着し越冬します。育苗ハウス周辺に潜んでいるいもち病菌が苗に移ることで発生を助長しますので、周辺の清掃と種子消毒、育苗期防除を組み合わせて清潔な環境で作業を行い、本田持ち込みは絶対に阻止します。

| 薬品名 | 防除時期 | 使用基準 | 使用回数 | 備考 | タフブロック併用 |
|----------|--------------|--------------------|------|-----|----------|
| ベンレート水和剤 | 播種時～播種14日後まで | 500倍液 500ml/箱 | 1回 | かん注 | × |
| | 播種時～播種7日後頃 | 1000倍液 1000ml/箱 | | | |
| ピームゾル | 緑化始期 | 500倍液 500ml/箱 | 1回 | かん注 | ○ |

※ベンレート水和剤の苗いもち防除時は使用回数1回までです。
※タフブロック使用種子では使用しません。

もみ枯細菌病にご用心

育苗期間中が高湿となる年が多く、もみ枯細菌病の発生が年々増加しています。もみ枯細菌病は、高温管理で発生が助長され、新葉の基部が白化、苗の基部は褐変腐敗して新芽は簡単に抜けるようになり枯死していきまます。もみ枯細菌病は温度管理が第一の発生原因で、その他環境要因が複合的に重なって発生します。また、一度発生すると翌年も発生しやすくなるため、必ず対策をすることが肝心です。



このページは秋田県農業共済組合との共同発行です。

対策① テクリードCフロアブルで種子消毒

万病対策は種子消毒から。もみ枯細菌病に登録のある「テクリードCフロアブル」で種子消毒します。ただし、葉液濃度が薄くなると効果が不十分となり病害が発生します。反対に濃いと葉害を引き起こす可能性があります。正しい葉液濃度で処理をしてください。テクリードCフロアブル 200倍液 24時間浸漬

対策② 使用する資材を消毒

一度発生させてしまった病害は、病原菌が育苗箱や被覆シートに潜んでいる可能性があります。使用前に「ケミクロンG」か「イチバン」で消毒をしてから使用してください。「ケミクロンG」は金属が腐食する可能性がありますので、処理後は水道水等での水洗が必要です。「イチバン」は水洗い不要です。

対策③ 温度管理の徹底

催芽から緑化期までは32℃を超えない管理が必要です。水温、ハウス内温度の管理をお願いします。播種後、育苗器内や無加温出芽被覆物下の床土温度が30℃を超えない温度管理をしてください。また被覆期間を過剰に長くせず、出芽後は再被覆はしません。育苗ハウスに並べた後は過保護にせず、換気を良くして高温多湿とならない管理としてください。

対策④ エコフィットの使用

前年、発病した方は「エコフィット」の使用をおすすめします。

「つぶぞろい」の栽培ポイント

J Aではこれまで中生品種の「ゆめおぼこ」を推奨してきましたが、近年は高温障害を受ける頻度が多くなっています。高温対策技術を推進しているもの、地球温暖化の影響により、技術対策だけでは対応できないほどの気象が今後も予想されており、同品種の栽培を継続した場合、品質低下による生産者手取りの減少や産地評価

| 品種名 | つぶぞろい | ゆめおぼこ | あきたこまちR |
|-----------------------------------|--------------------|----------------|----------------------|
| 早晩性 草型 | 晩生 中間型 | 中生 中間型 | 早生 偏穂数型 |
| いもち耐病性 葉いもち 穂いもち | やや強 強 | やや弱 やや強 | 中 やや弱 |
| 耐倒伏性 耐冷性(障害型) 穂発芽性 高温登熟性 | やや弱 中 中 中 | 中強 中 やや弱 | やや弱 中 やや難 中 |
| 出穂期(月日) | 8.4 | 8.3 | 7.27 |
| 成熟期(月日) | 9.21 | 9.19 | 9.5 |
| 稈長(cm) | 77 | 77 | 76.8 |
| 穂長(cm) | 18.5 | 18.7 | 17.3 |
| 穂数(本/m ²) | 453 | 424 | 439 |
| 収量(kg/a) | 64.8 | 61.4 | 55.6 |
| 千粒重(g) | 25.1 | 25.1 | 22.7 |
| 品質(1~9) | 上の中 | 上の中 | 上の中 |

苗立枯病対策

床土に焼土や人工培土を使用していない場合、タチガレエースM剤かナエファイン剤を使用してください。また、育苗期間中は、ハウス内温度を昼間30℃以上、夜間10℃以下にしません。かん水などによってハウス内が蒸れないように適度に換気を行い、適切な温度・水管理を行い、苗立枯病の発生を防ぎましょう。

「エコフィット」適用表

| 作物名 | 希釈倍率 | 使用液量 | 使用時期 | 使用回数 | 使用方法 |
|--------|------|---------|------|------|--------|
| 稲 | 100倍 | — | 催芽時 | 1回 | 24時間浸漬 |
| 稲(箱育苗) | | 500ml/箱 | 播種時 | | 灌注 |
| | 10倍 | 50ml/箱 | | | 散布 |

〔NG例〕
× テクリードC処理種子で催芽(播種時はOK)
× ダコニールまたはダコレート播種時灌注処理
〔その他〕
育苗培土に有機物が多いと微生物同士の干渉作用によって発生が少ない傾向にあります。ハイフミンやアズミンを混和するのも対策のひとつです。

春先のほ場準備

乾田化促進
昨秋、乾けなかつたほ場では雪解け後すぐに乾田化を促進させる作業を行います。十分に乾かせないでいると、田植え早々から異常還元が発生して初期生育が十分に取れない場合があります。さらに、中干しが降雨等で十分にできなかつた場合、生育期間を通して異常還元状

| 使用時期 | 農薬名 | 使用量・希釈倍率 | 散布量(箱当たり) | 使用方法 |
|----------|-------------|------------|-----------|------------|
| 床土混和 | タチガレエースM粉剤 | 6~8g/箱 | — | 育苗培土に均一に混和 |
| | ナエファイン粉剤 | | | |
| 播種時 | タチガレエースM液剤 | 1000倍 | 1ℓ | 土壌灌注 |
| | ナエファインフロアブル | 1000倍 | 500ml | |
| は種時又は発芽後 | タチガレエースM液剤 | 2000倍 | 500ml~1ℓ | 土壌灌注 |
| は種時から緑化期 | ナエファインフロアブル | 500~1000倍 | 500ml | |
| | ナエファインフロアブル | 1000~2000倍 | 500ml | |

※タチガレエースM剤はピシウム菌とフザリウム菌に効果。
※ナエファイン剤はピシウム菌とフザリウム菌、リゾプス菌に効果。ただし、出芽後処理はピシウム菌のみ。
※タチガレエースM剤、ナエファイン剤ともに出芽後処理は防除効果が劣る。

栽培のポイント

① 大粒、多収、晩生だからこそ土づくり

「つぶぞろい」は大粒で多収であり、生育・登熟期間が長い晩生品種です。じっくりと大粒に実らせるためにも根の活力を維持する土づくりが重要です。土づくりの第一歩である「ケイ酸」資材は必ず使用します。

高温登熟性は「中」であるため、油断せずに「ケイ酸」を投入し、土づくりをしていかなければなりません。



ケイ酸は流亡しにくいので秋散布でOK! どれもアルカリ分があるので酸性になりやすい水田土壌の酸度矯正にピッタリ。

投入量:40kg以上/10a
※1袋からでも継続が力になる!

② 施肥量

「ゆめおぼこ」同等を基本とします。基肥チツソは8kg/10a程度としますが、ほ場の地力に合

わせて加減してください。追肥は、減数分裂期に1kg/10aで実施し、葉色の維持を図りながら登熟歩合を高めます。総チツソ量は9~11.5kg/10a程度とします。

| |
|---------------------------------|
| 基肥 N:8.0kg/10a ※基肥エースX2袋程度 |
| 追肥 N:1.0~1.5kg/10a ※減数分裂期に実施 |
| 総N量 9.0~11.5kg/10a |

ほ場に合わせて加減します。最後まで肥切れを起こさず、実りきるチツソ量としましょう。

③ 病害虫防除

「つぶぞろい」の栽培は慣行栽培で構いません。いもち病には強い特性がありますが、種子消毒、育苗期防除を徹底し、箱処理剤などによる予防策を取って、本田持ち込みを阻止します。

④ 栽培のポイント

- ◆ 晩生品種であるため、極端な遅植えは避けず。
- ◆ 千粒重が重いいため、浸種・催芽は水温と日数を十分に確保します。
- ◆ 大粒であるため、同じグラム数を播種しても苗本数が少なくなる可能性がありますので、播種時に調整をします。
- ◆ 栽植密度は70株/坪を基本とします。疎植植えは無効分げつ

推奨肥料 基肥とる助

「つぶぞろい」の栽培では、使用肥料の指定はありませんが、「つぶぞろい」の生育にあった肥料の使用をオススメします。新肥料「基肥とる助」は、生育後半にもジワリと養分溶出があり、晩生品種にも最適です。

| チツソ | 内糞効性 | リンサン | カリ |
|-----|------|------|----|
| 23 | 11.5 | 12 | 12 |

比重が0.8と軽いいため、施肥機の開度調整にご注意ください。



- ◆ 「あきたこまちR」よりは倒伏に強いと見えますが、多肥栽培などでは倒伏します。
- ◆ 晩生、大粒品種であるため落水時期は可能な限り遅くします。刈り取り適期は、出穂期後50日、1,0500~1,1500℃とします。
- ◆ が多くなります。植え付け本数は4~5本/株とします。
- ◆ 茎数が増えやすいため、深水管理、中干し時期を逸さないようによく観察をしましょう。

態、土中の酸素が少ない状態となり、根張りが不十分となり、収量や品質低下、倒伏といった悪影響が出かねません。
転回部分の停滞水排水
コンバインの転回部分やクローラ跡に溜まっている水は汲みだし、排水口に繋ぐなどして、排水しましょう。
水管理の要々畦畔補修
効率的な水管理を行うためにも水をしっかりと溜められる畦畔が必要です。また、太茎形成や気象に対応するための深水管理(水深15cm以上)ができるような畦畔に補修しましょう。
ケイ酸資材の散布
令和8年稲作も土づくりを起点とした米づくりに取り組みましょう。令和に入ってから極端な気象が顕著になっており、これまで地力に頼ってこられた管内でも収量品質の不安定化が顕在化してきました。見えない土の中を想像し意識することから土づくりは始まります。土づくりの第一歩として「ケイ酸」を積極的に投入しましょう。管内の土中ケイ酸は決して多くありません。継続的にケイ酸資材を投入してください。
ケイ酸が十分にあると、葉がピンと立ち、根も元気になって品質改善、収量増加が期待できます。高温障害はもちろん異常気象の事前対策としてケイ酸を使ってください。